

■旭玉山 象牙彫刻と嵌入彫刻を主な表現として活動した彫刻家。その世界では特別な存在ながら、一般には知られなかった。

あさひぎょくさん
順天堂始・1843＝ 浅草今戸邊の真宗の寺の次男に生まれる。幼名は富丸。
誕生直後に父が死去、お人好しの母のもと、
阿部正弘首座1845＝ 2歳： 親戚筋の真宗僧が後見人になるも私腹を肥やす人物で、借金ができるまでになるなか、雑用にこきつかわれるばかりで、寺子屋に行きたいと願うも無視され、兄が寺を相続して、後見人が身を引くと、

万次郎帰国・1852＝ 9歳： 浅草の小商いの家に養子に出され、富三郎と名付けられ、寺子屋にも通えるようになったが、
ペリー来航・1853＝10歳： 養父が病死、生活が一気に窮した上、大地震で養家も焼失、実家に戻らざるを得なくなる。寺の雑用の暇に、
安政大地震・1855＝12歳： 生来の器用さで指物細工をするうち、夜店などで買ってもらえるようになり、多くを売ってくれる店もできたが、満足できずにいるうち、庭の蛙を見て、彫ってみたところ、思わぬ満足感が得られ、以後、蛙彫りに没頭。かなりの額で買ってくれる人も登場。
五ヶ国条約・1858＝15歳： 再び、養母と暮らすようになるも生活は困窮、自らの食事は生家でするうち、兄からお経を教えて貰い、頭を剃って、兄の代わりを務め、お布施を貰うも耐えられないなか、ある貧しい家にお経に行った際に包んでくれた二百文ものお布施に手をつける気にならないでいるうち、ある古本屋で北斎の版木を見出し、その金で、本のようなものを初めて購入して有頂天になり、近くでやっていた講釈師の「世界物識早学問」を聞きに入り感動、誠の志をもって生きて行こうと、生家の寺を出、養母と暮すうち、
安政の大獄・1859＝16歳： 蛙の根付を彫り、それを売って生計を立てようと決意、商売人の間でも相場がつくようになり、銘を入れるように勧められて、玉山と号すると、横浜開港で外国貿易が始まり、日本の美術品とくに根付が飛ぶように売れだし、道具屋〃ハタ師〃の註文で、象牙で根付を彫りはじめ、平彫りもするようになる。

桜田門外変・1860＝17歳：
遣欧使節・1861＝18歳：
8月18日政変 1863＝20歳： この頃には、象牙でなんでも彫れるようになり、猿も得意になって行く。
明治維新・1868＝25歳： 結婚。名人のものを参考にしながら觸體の根付を制作するようになり、
戊辰戦争終・1869＝26歳： オランダ軍人の頭骨を貰い受けた松本順から根付くらい大きさのものをつくって欲しいとの依頼を引き受け、彼の病院に通って研究し制作、大変喜ばれ、以後ひき立てられるようになり、
初の日刊新聞1870＝27歳： 疥癬に罹ると治療してくれ、代理で診てくれた軍医石黒忠恵とも懇意になり、觸體を貰って以後専門的に研究するだけでなく、石黒の紹介で、大学東校の解剖科に通い、田口和美の指導も受けて人体骨格全体も研究、その間、アメリカの医務総裁グロースから著書を送られた松本に頼まれ、返礼に彫った時計下げの觸體はグロースの賞賛を受け、以後、洋行する医者必需品となり、外国の好事家の間で評判になって行く。

明治6年政変 1873＝30歳：
西南戦争・1877＝34歳： 第一回内国勲業博覧会に三分の一サイズの「人体骨格置物」を出展して竜紋賞を受賞、
大久保暗殺・1878＝35歳： フランスの博覧会にも出品したが行方不明になってしまった。この間、象牙彫刻の匠が多数登場し群雄割拠状態になってきたため、象牙美術商の賛同を得て、石川光明と共に牙彫発展のために競技会と批評会の定例開催をはじめるも、他の連中は職人氣質のまま、芸術というものも分からないという困難のなか、

琉球処分・1879＝36歳：
・1880＝37歳： 男子が一人を遣して、妻が死去。2、3年後には養母も死去するが、もともと酒も煙草ものまず、道楽もなく、仕事だけが好きだったこともあって、以後、その前から甥を後継者にすべく、独身で門人養成に尽力、

明治14年政変1881＝38歳： *第二回内国勲業博覧会で五分の一サイズの「牙彫觸體置物」を出展して、最優等の名誉賞となり、明治天皇の、御前で賞状を授与される栄誉を得、その名声を不動のものにし、
内閣発足・1885＝42歳： 競技会と批評会を発展的に解消して「東京彫工会」を興すと、始まった明治宮殿新築の彫刻御用をすべて引き受けるようになり、代表して宮内省に出向き工芸家達に彫刻制作の差配、不遇だった木彫家なども世に出るようになって、信頼はゆるぎないものになるものの、
初の対等条約1888＝45歳： 明治宮殿が竣工。
帝国憲法発布 1889＝46歳：
帝国議会始・1890＝47歳： 眼病を患い、医者から仕事を禁じられ、大磯にいた松本が家まで建ててくれて、門人の身の振り方を決めたのち、養子と実子のみつれて移住、今までの生活を振り返るうち、空しいものに思えて来、高村光雲、石川らが東京に戻って来て欲しいと言われると、逃げるように、
大本教・1892＝49歳： 京都に移住するが、世間との交渉は断ち切れず、
日清戦争始・1894＝51歳：
日清戦争終・1895＝52歳： 京都での第四回博覧会、
八幡製鉄始・1897＝54歳： この間、正倉院あたりの古美術商について嵌入彫刻を学んで大成、
ビアノ国産化・1900＝57歳： 開催のバリオ国博覧会に向けて制作を進めた「官女置物」は間に合わず、国からの代金返済に追われ、
田中正造直訴1901＝58歳： *日本美術協会展に出展して、東京御用となり、明治牙彫の代表作のひとつになった。

日比谷公園・1903＝60歳： 大阪での第五回博覧会の審査員を務めた。

日露戦争終・1905＝62歳：
満鉄発足・1906＝63歳： 木彫での嵌入彫刻や鹿角彫刻も行ったが、後継者たる養子に先立たれ、

明治天皇没・1912＝69歳： 晩年は素朴で抑えた表現の作品に傾倒していき、

21ヶ条要求・1915＝72歳：

原敬首相暗殺1921＝78歳： 美術協会の建築費に寄付すべく、協会委員が合作の屏風を作った際、長年秘蔵してきた海松の材料を用いて万年茸の嵌入を試み、合作中の逸品になったのを最後に、

関東大震災・1923＝80歳： 没した。